

日本フランス語フランス文学会

2021 年度春季大会

2021年5月22日(土)・23日(日)

主催校 上智大学 〒102-8554 東京都千代田区紀尾井町7-1

大会本部：上智大学文学部 フランス文学科

TEL：03-3238-3984 MAIL：sophia2021sjllf@gmail.com

■今大会は、オンライン方式で開催します。

■大会参加にあたり、招請状の必要な方は学会事務局までご請求ください。

■委員会・役員会につきましては、学会事務局よりご連絡いたします。

■賛助会員展示は、オンライン会場にて開かれます。

■お問い合わせは、なるべくメールでお願いします。

大会費 無料

懇親会 大会がオンライン開催のため、開催されません。

第1日 5月22日(土)

幹事会 10:40 - 10:50

役員会 10:50 - 12:00

開会式 12:50 - 13:00

司会 博多 かおる (上智大学)

開会の辞・開催校代表挨拶

吉村 和明 (上智大学名誉教授)

会長挨拶 石井 洋二郎 (中部大学)

研究発表会

第1部 13:10 - 14:50

第2部 15:00 - 16:40

特別講演 17:00 - 18:30

Antoine COMPAGNON (Professeur au Collège de France)

Baudelaire caricaturiste

司会：中地 義和 (東京大学名誉教授)

第2日 5月23日(日)

ワークショップ第1部 10:00 - 12:00

1. ボードレール (から) の越境
2. 『レペルトワール』を読む

ワークショップ第2部 13:00 - 15:00

3. 生誕200年 フロベールを読み直す
4. ジャック・デリダとジャン＝リュック・ナンシー
友愛と共同性
5. l'écriture inclusive 再論

ビデオセッション 15:15 - 16:15

総会 16:30 - 18:00

議長 岩野 卓司 (明治大学)

閉会式 18:00 - 18:10

会長挨拶 石井 洋二郎 (中部大学)

閉会の辞 小倉 博孝 (上智大学)

研究発表会プログラム 5月22日(土)

	第1セッション(13:10-14:50)※	第2セッション(15:00-16:40)※
A	<p>中世</p> <p>司会：小栗栖 等 (名古屋大学)</p> <p>1. ハープと貴婦人—ギョーム・ド・マショー『ハーブの賦(ディ)』について 片山 幹生 (大阪市立大学研究員)</p> <p>2. クレチアン・ド・トロワにおける香り 武藤 奈月 (ソルボンヌ大学大学院博士課程)</p> <p>3. 「洗礼」の語彙について—ガラン・ド・モングラエヌ詩群の例から 宮下 拓也 (京都大学大学院博士課程)</p>	<p>18世紀/19世紀1</p> <p>司会：鈴木 球子 (信州大学)</p> <p>1. なぜミスティヴァル夫人の性器が縫われたのか—サド『閨房哲学』の結末を読む 上田 雅子 (京都大学聴講生)</p> <p>司会：片岡 大右 (東京大学)</p> <p>2. シャトーブリアンの「荒野の騎士の歌 <i>Chanson du chevalier des landes</i>」について 別役 昌彦 (プレスト大学内ブルターニュ・ケルト研究所協力研究員)</p> <p>司会：福田 美雪 (青山学院大学)</p> <p>3. マネによる黒服の男の作品における一つの系譜的視点 松本 夏恵子 (東北大学大学院修士課程修了)</p>
	B	<p>19世紀2</p> <p>司会：熊谷 謙介 (神奈川大学)</p> <p>1. 冷たい宝石にはなれなくて —「エロディアド：舞台」鏡との対話の果てに * 清水 佳暁 (東京大学大学院博士課程)</p> <p>2. 剣を持った〈詩人〉 — 口絵としての「エドガー・ポーの墓」 菊田 怜央 (東京大学大学院博士課程)</p> <p>3. Georges Eekhoud et la peinture — <i>embryon de critique d'art dans La Nouvelle Carthage</i> * 吹田 映子 (自治医科大学助教)</p>
C		<p>20世紀2</p> <p>司会：星埜 守之 (東京大学)</p> <p>1. イレーヌ・ネミロフスキー『誤解』に描かれる元兵士のトラウマ * 秦 佳代 (北海道大学大学院博士課程)</p> <p>2. マリー・ンディアイ『家族で』における少女の旅の破綻 * 今野 安里紗 (筑波大学大学院博士課程)</p> <p>3. 漂着するのは人間だけか? — シャモワゾー『クルーソーへの足跡』における開かれた無人島 — * 中江 太一 (東京大学大学院博士課程)</p>

※ 発表は1件につき30分(発表25分+質疑応答5分)です。今回、各発表の間に5分間のポーズを設けておりますので、2番目の発表は分科会冒頭から35分後の開始、3番目の発表は70分後の開始となります。司会者は、開始時刻に十分ご注意ください。

*を付した発表題目につきましては、会員に送付したプログラムでは、修正可能期間内に発表者がおこなった修正が反映されておりませんでした。心よりお詫び申し上げます。(大会実行委員会)

特別講演会 5月22日(土)

特別講演会 17:00~18:30

司会：中地 義和（東京大学名誉教授）

Antoine COMPAGNON
(Professeur au collège de France)

Baudelaire caricaturiste

Alors que Baudelaire condamne la photographie dans le *Salon de 1859*, la lithographie lui convenait : « Pour le croquis de mœurs, la représentation de la vie bourgeoise et les spectacles de la mode, le moyen le plus expéditif et le moins coûteux est évidemment le meilleur. [...] Dès que la lithographie parut, elle se montra tout de suite très apte à cette énorme tâche, si frivole en apparence », rappelle-t-il dans « Le peintre de la vie moderne ». Or la lithographie fit le succès de la caricature, dont Baudelaire fut curieux, et qu'il transposa dans les « Tableaux parisiens » et *Le Spleen de Paris*.

ワークショッププログラム 5月23日(日)

ワークショップ第1部 10:00~12:00

ワークショップ1

ボードレール(から)の越境

コーディネーター：吉村和明(上智大学)

パネリスト：岩切正一郎(国際基督教大学)、海老根龍介(白百合女子大学)、山田兼士(大阪芸術大学)

ベンヤミンによれば、ボードレールが『悪の華』の読者として望んでいたのは「抒情詩を読むことに困難を覚える」人々であった。そういう読者に向けて彼は「偽善の読者よ、わが同類よ、わが兄弟よ」と呼びかけたというのだ。もしそうだとしたら、そんなボードレールは、生誕二百年を迎えたいま、どのように読まれうるだろうか？ こう問うことは、詩人を〈文学場〉のなかに囲い込むのではなく、逆にそこから解き放つ契機になるのではないか。このような問題意識を下敷きに、それぞれのパネリストの観点から、今日にありうべきボードレール像を検討してゆく。

(岩切) ボードレール生誕百年の頃、フランスの中等教育での文学史における彼の評価は(つまり文学史の本を執筆する著名な文学者からの評価は)相当低く、詩人たちが彼を賞賛するのと良い対照をなしていた。そのことはFayolleやGuyauxたちもすでに論じているが、生誕二百年を迎えた今、私たちは文学史のなかで不動の地位を得ているボードレールの何に魅入られ、彼を通して何を自分のなかに構築しながら、日本でその作品を読んでいるのか、あらためて考えてみたいと思う。

(海老根) 近年の日本において、アカデミズムにおけるボードレール研究が積み上げられる一方で、その外部に与える詩人のインパクトは感じにくくなっている。ボードレールを語る「文脈」はどう変化したのか、それを考えるヒントとして、詩人の死後百年前後に刊行された、雑誌の「ボードレール特集号」をいくつか取り上げる。西脇順三郎の「ボードレールと私」が巻頭に置かれた1966年の『無限』、阿部良雄が洪沢孝輔、出口裕弘、松山俊太郎とともに行った座談会が白眉をなす1973年の『ユリイカ』などを題材に、何が語られたかだけでなく、いかに語られたかに着目して論点を提示する。

(山田) ボードレールによる音楽論といえば、ヴァーグナーの「タンホイザー」パリ上演の際に書かれた論考と、若き日のピエール・デュポンとの交流から生まれたエッセイくらいしかない。だが、その死後、クロード・ドビュッシーをはじめとする作曲家たちがボードレールの詩による歌曲を制作し、さらに20世紀には、レオ・フェレに代表される歌謡(シャンソン)の重要なレパートリーになった。ボードレールにとって詩と歌はどのような関係にあったのか。その鍵の一つである「犬」のイメージ分析を試みる。

ワークショップ2

『レペルトワール』を読む

コーディネーター：石橋正孝(立教大学)

パネリスト：新島進(慶應義塾大学)、三ツ堀広一郎(東京工業大学)、三枝大修(成城大学)、福田桃子(慶應義塾大学)

1950年代のフランス文壇を席卷したヌーヴォ・ロマンの一角を占め、生前から世界各地でたびたび学会の対象となり、全集も刊行されたミシェル・ビュートル(1926-2016)。彼の死から5年が経過しようとしている今、膨大かつ多彩なその全文業を振り返れば、初期の小説4作の輝きは今なお色褪せないにせよ、それ以上に詩人、そしてエッセイストとしての存在感が圧倒的に迫ってくる。後者の活動の起点となり、代表的成果である全五巻の評論集〈レペルトワール〉の全訳が幻戯書房よりこのたび開始されたことを期に、今回はエッセイスト・ビュートルの魅力を再発見する一助として、本ワークショップを企画することにした。パネリストは、第一回の翻訳に関わった五名である。監訳者の石橋正孝(立教大学)が司会を務め、ルーセル論ほかを担当した新島進(慶應義塾大学)が、ビュートルの「師」にしてシュルレアリストであるミシェル・カルージュの本書における影を、ラシーヌ論を担当した三ツ堀広一郎(東京工業大学)がビュートルの美術評論を、三枝大修(成城大学)が自身の訳した二本のキュルケゴール論を、ドストエフスキー論そのほかを担当した福田桃子(慶應義塾大学)が、このロシア作家とビュートルについてそれぞれ論じる。

ワークショップ第2部 13:00~15:00

ワークショップ3

生誕200年 フロベールを読み直す

コーディネーター：小倉 孝誠（慶應義塾大学）

パネリスト：塩塚秀一郎（東京大学）、中島太郎（中京大学）、松澤和宏（名古屋大学）

今年生誕200年を迎えるフロベールは、同時代および後世の作家（そこにはジョイスやカフカなどの外国人作家も含まれる）に絶大な影響を及ぼし、現存作家の何人かにとっても重要なアイコンであり続けている。フランス文学史上もっとも美しい書簡集の一つと評判の高い彼の手紙はPléiade叢書に全5巻が収録され、これまでの研究成果を反映した新たな全集が、同じ叢書で2001年に始動した。日本では、『ボヴァリー夫人』、『サラムボー』、『ブヴァールとペキュシェ』などの主要作品がこの数年間で久しぶりに新訳されて、新たな読者を得ている。フロベールはつねに若々しい作家なのだ。

こうした経緯を踏まえたいうで、現代のわれわれはフロベールをどのように読めるのか。彼は19世紀の文学風土のなかでどのような位置を占めていたのか。そして20世紀後半から現代に至る文学場で、どのような位相にあるのか——こうした問題を聴衆と共に考察してみたい。

松澤は、1960年代以降のフロベール研究において軽視されがちであったモラリスト文学としての側面に光をあてる。『ボヴァリー夫人』では、凡庸な人物とみなされてきたシャルルは、エマの死後にパティティックな人物に変貌し、赦しを乞うてさえいないロドルフを無条件に赦し、翌日「愛の香気」の漂う自然のなかに消えるように死んでいく。シャルルのこの「変貌」の意味を読み解きながら、有名なimpersonnalitéの美学の倫理的思想的次元とその今日的な意義を問う。

中島は、フロベール作品の重要な一角をなす宗教の主題を中心に、宗教的形象及びそこに通底する問題について考察する。複数の作品にまたがる信仰と知識（科学）の葛藤は、同時代の宗教知や脱宗教化の歴史といかなる関係を切り結ぶのか。徹底して反教権主義の立場を貫く作者が、作品ごとに膨大な宗教書を参照し、宗教の多様な表出を描き続けたことの意味を、近年の研究動向も踏まえつつ考える。

塩塚はフロベールがクノーとペレックによっていかに受容されたかについて紹介する。クノーもペレックも言語遊戯で知られるウリポの作家であるが、彼らによるフロベール受容は必ずしもその側面に関わるものではなく、また、ヌーヴォー・ロマンを始めとする現代小説による受容とも異なるように思われる。袋小路、空白、リスト、実在資料、百科事典などをキーワードにしつつ、両者によるフロベール受容の意味を考えたい。

ワークショップ4

ジャック・デリダとジャン＝リュック・ナンシー 友愛と共同性

コーディネーター・パネリスト：市川 崇（慶應義塾大学）

パネリスト：柿並良佑（山形大学）、伊藤潤一郎（日本学術振興会特別研究員）、松田智裕（立命館大学初任研究員）

現代フランスの代表的哲学者ジャック・デリダ（1930-2004）とジャン＝リュック・ナンシー（1940-）との間には、深い友愛があったこと、また思想上の強い類縁性があることは知られている。二人の哲学者の思想上の交流は、1965年にナンシーがデリダの雑誌論文「グラマトロジーについて」を読み、デリダの思想について「注釈」というテキストを記し、デリダに送付したことからは始まるが、ナンシーは1980年にはフィリップ・ラクー＝ラバルトと共にデリダの思想をめぐるシンポジウム「人間の終焉／目的」を開催し、またデリダの没年である2004年にも「ストラスブールで思考する、デリダと共に」を開催している。その間、ナンシーはデリダについて多くの論文を執筆しており、2019年には、1987年から2017年に発表された代表的なデリダ論をまとめた『デリダ、代補（補遺）』が刊行された。本ワークショップでは、この『デリダ、代補（補遺）』に収められたデリダ論を出発点に、両哲学者の思想の近接性と差異を考察することが目指される。

司会兼パネリストの市川は、『デリダ、代補（補遺）』に再録された「ユダヤ・キリスト教的なもの」における「信」の概念を取り上げ、デリダが『信と知』において提示した「信」をめぐる考察との差異に注目し、それが両者それぞれの民主主義解釈にどのような方向性を与えているのかを問う。柿並良佑は、デリダが『友愛のポリティックス』において、ナンシーの「（友）愛と共同体」についての思考に対して行なった批判的読解を『無為の共同体』に立ち戻って検討する。伊藤潤一郎は、『デリダ、代補（補遺）』の序文でナンシーが語るデリダの声の「調性 tonalité」についての回想に注目し、ナンシーにおける「調性」、「意味／方向 sens」などの概念の射程、またこの点をめぐるデリダ哲学との距離の測定を試みる。松田智裕は、1975年に「哲学教育研究グループGREPH」を創設したデリダとナンシーが哲学教育改革のみならず、哲学の変貌を考えていたことに注目し、1977年に発表された「ヘーゲルの時代（年齢）」（デリダ）、「第五学年における哲学」（ナンシー）に見られる両者の思想の「近さ」と「遠さ」を検討する。

ワークショップ5

l'écriture inclusive 再論

コーディネーター・パネリスト：立花史（フランス語圏文学）

パネリスト：矢頭典枝（カナダの言語政策）、Olivier Ammour-Mayeur（現代フランス文学・ジェンダー研究）、片山幹生（中世文学）

本ワークショップは、今日フランスで激論が交わされている**l'écriture inclusive**を主題とする。ただし、この主題は、フランスやケベックを中心とするフランス語圏の地域文化のみならず、日本でのフランス語教育や教科書作成、さらにはフランス語文学の歴史と将来にも関わる非常に大きな射程を持っているため、今回は、この書法の国際比較と、フランス語の規則の成り立ちを軸として、おおまかな情報共有と問題提起にとどめることにしたい。

フランスでは、2015年以降、男女平等高等評議会（HCE）のガイドブックやMots-Clés社のマニュアルによって、ジェンダー間の平等のための包括書法（**l'écriture inclusive**）が急速に注目を集めた。この書法の推進者は、男社会と歴史的に結びついたフランス語の男性形優位の規則を問題視して、女性形を含めた二重語の並置（**professeures et professeurs**）や、二重語を短縮した分かち表記（**professeur.e.s**）を奨励し、単数大文字のHommeやFemmeによって人々を表現する換称法（**antonomases**）を避けるよう提案している。

この書法に対し、相当数の支持層がいる一方で、アカデミー・フランセーズが猛反発し、さらには複数の言語学者が連名で反対を表明しているものの、それぞれのアクターが、複数の提案を含むこの書法のどの部分に対してどの程度の拒絶を示しているのかは必ずしも明快ではない。また、そもそも包括書法は一つではなく、フランス語圏の各地域によってかなり指針の違ったものとなっていることもこの議論を深く理解する上で重要かと思われる。

そこで、本ワークショップでは、コーディネーターとして立花が初めに長めの趣旨説明をおこなった上で、Olivier Ammour-Mayeurが、ジェンダー研究の見地を踏まえて、包括書法のアウトラインを示すと同時に、名詞の女性形化についてフランス語で検討する。そのあとは日本語による発表として、片山幹生が、歴史文法を踏まえたフランス語教育を实践する立場から、この議論に対して歴史的な補足をおこなった後、最後に矢頭典枝が、言語政策研究の見地から、ケベックで奨励されている包括書法の可能性や課題について考察する予定である。

*ワークショップ5「**l'écriture inclusive** 再論」のコーディネーターおよびパネリストの肩書き・専門分野につきまして、会員に送付したプログラムでは、ご依頼いただいたとおりに記載しておりませんでした。心よりお詫び申し上げます。（大会実行委員会）

ビデオセッション プログラム 5月23日(日) 15:15 - 16:15

	発表題目／発表者	コメンテーター
A	1. レ枢機卿のマザリナードと『公衆』 涌井 萌子 (大阪大学大学院博士後期課程) 2. ジャック＝ベニーニュ・ボシュエ『世界史論』を読む 伊藤 連 (東京大学大学院博士前期課程)	野呂 康 (岡山大学) 野呂 康 (岡山大学)
B	1. 機械・調和・瞬間—17世紀後半から18世紀フランスにおける絵画言説史 村山 雄紀 (早稲田大学大学院博士後期課程) 2. 19世紀フランス絵画における教会内部の主題 大屋戸 しおり (東京大学大学院博士後期課程) 3. 19世紀フランス文学者のエジプト旅行記にみる踊り子「アルメ」 渡辺 采香 (お茶の水女子大学博士後期課程)	王寺 賢太 (東京大学) 津森 圭一 (新潟大学) 畑 浩一郎 (聖心女子大学)
C	1. 『カルメン』におけるホセの人物像 戸田 千晶 (大阪大学大学院博士前期課程) 2. ステファヌ・マラルメにおける道化の表象 藤本 和 (明治学院大学大学院博士後期課程) 3. マラルメの「限定された行動」と後期韻文詩 酒田 義之佑 (東京大学大学院博士前期課程)	博多 かおる (上智大学) 原 大地 (慶應義塾大学) 原 大地 (慶應義塾大学)
D	1. 『失われた時を求めて』における戦術論 — 「模倣」と「模倣をはぐれるもの」の共存 宮川 朋 (上智大学大学院博士後期課程) 2. ジャン・アルプとゾフィー・トイバー＝アルプの共同制作 青池 瞳 (早稲田大学大学院博士前期課程) 3. マッソンとミロのオートマティスム — 1920年代シュルレアリスムにおける画家の実践 — 古屋 詩織 (早稲田大学大学院博士後期課程)	坂本 浩也 (立教大学) 長谷川 晶子 (京都産業大学) 長谷川 晶子 (京都産業大学)
E	1. ジャン・ポーランにおける文学言語と常套句の問題 加覧 咲 (早稲田大学大学院博士前期課程) 2. ジョルジュ・バタイユにおけるエネルギーについて 石野 慶一郎 (東京大学大学院博士前期課程) 3. 「透明な巨人」の変身 佐々木 大輔 (早稲田大学大学院博士前期課程)	岩野 卓司 (明治大学) 岩野 卓司 (明治大学) 前之園 望 (中央大学)
F	1. 文学論としてのジュリアン・グラック『ひとつの町のかたち』 新庄 直大 (東京大学大学院博士前期課程) 2. ル・クレジオ初期作品に見られる都市のテーマについて 板場 匡史 (東京大学大学院博士前期課程) 3. パトリック・モディアノにおける記憶の反復とは — 『眠れる記憶』と『失われた街』に登場する女性たち 山中 直美 (東京大学大学院博士前期課程)	三ツ堀 広一郎 (東京工業大学) 鈴木 雅生 (学習院大学) 鈴木 雅生 (学習院大学)

* A から F のセッションは並行して行われます。一人 20 分：ビデオ (10 分以内) とコメント・ディスカッション 10 分程度です。

オンライン関連情報

I: 大会までのご準備

・本大会では、ウェブ会議システム zoom (<https://zoom.us>) を使用します。あらかじめ、ご使用の PC やタブレット端末等に zoom アプリ（無料版で可）をインストールしていただきますよう、お願いいたします（【参考】 zoomPC アプリのインストールの方法：<https://zoom-japan.net/manual/pc/zoom-pc-app/>）。

・分科会発表要旨 PDF は、学会ホームページ (<http://www.sillf.org>) にパスワードをかけてアップいたします（5月中旬予定）。

・開会式、分科会、特別講演、ワークショップ、ビデオセッション、総会、閉会式、および賛助会員展示会場の zoom ミーティング情報（ミーティング ID、パスコード）、発表要旨閲覧用のパスワードおよびビデオセッションのビデオ閲覧に関する情報は、学会事務局より一斉メールでお知らせします（5月中旬予定）。メールアドレスの登録がお済みでない会員の皆様におかれましては、これを機に事務局へのメールアドレスの登録をお願いいたします（メールアドレス登録：学会ホームページ>「事務局より」>「個人会員用 登録情報の変更」）。

・本大会の zoom ミーティング情報や発表要旨閲覧用パスワード、さらにビデオセッションのビデオ閲覧に関する情報や分科会発表要旨（電子版）は、本会員のみ利用とさせていただきますので、情報の取り扱いには十分ご注意ください。非会員で参加を希望される方がありましたら、1) お名前 2) ご所属 3) 参加を希望される分科会やビデオセッション、特別講演、ワークショップ（複数可）を、5月20日（木）までに本大会実行委員会 (sophia2021sillf@gmail.com) までメールにてご連絡ください。zoom 情報をお知らせいたします。

・その他、オンライン大会にかかる最新情報は、学会ホームページにアップいたしますので、適宜ご確認ください。

II: 大会当日の留意事項

・開会式、分科会、特別講演、ワークショップ、ビデオセッション、総会、閉会式につきましては、登壇者および司会者以外はビデオオフ、マイクミュートの状態でご参加ください。大会の円滑な運営のためにご協力をお願いいたします。

・本大会開催中に録音や録画、スクリーンショット撮影等を行い、許可なく配信・転送することはお控えください。

メモ